

# ブルキナファソ体験談

## 【回答者 profile】

氏名：畦地 崇敬（あぜち たかのり）

派遣国：ブルキナファソ

職種：植林

活動期間：2002年7月～2004年7月

## 【ブルキナファソ 一問一答】

### ①どんな国なんですか？

ブルキナ・ファソ(Burkina Faso)は西アフリカの内陸国(海から500kmくらい離れてます)で、北と西はマリ、東北ではニジェール、東南ではベナン、そして南ではコート・ジボアール、ガーナ、トーゴと国境を接し、国土はおおよそ日本の7割で、その大部分は平坦な土地です。



気候はサヘル・スーダン帯で、雨季が7～10月、乾季が11月～6月まであります。今、松山は水不足らしいですが、こっちは今乾季なので10月くらいから一滴も雨が降ってません。

めちゃくちゃ乾燥してますよ。最近早朝はだいぶ涼しくなりましたが、昼間の日差しは暑く、1月だというのに半袖で過ごせるし、僕の顔は真夏のように真っ黒です。

まあ、寒くなくていいんですが、今の季節、ハルマツタンと呼ばれる北東からの季節風がビュンビュン吹いてて黄砂のような砂埃がすごいです。



この国はお隣のマリなんかと比べると観光資源に乏しいのがちょっと寂しいですね。国立公園なんかに行くとゾウやライオンなんかが見えるらしいですけど、僕はこの国に来て半年、まだそんな野生動物なんて見たことないです。動物といたら家畜くらい…。

でも観光資源がないわけではなく、この国の首都ワガドゥグで1年おきに開かれるアフリカ映画祭 FESPACO は結構有名です。ここから何本もの名作が世界にはばたいており、いわば「アフリカのカンヌ」といえるかも。



## ②畦地さんの今している仕事について教えてください。

僕は今この国に青年海外協力隊の植林隊員として来ています。今、ブルキナ・ファソをはじめとするサヘル地域(サハラ砂漠周辺地帯の呼称)では、長年の干ばつと、人口増加に伴う耕作地の拡大にかかわる樹木の伐採に起因する砂漠化が深刻な問題となっています。

この問題に対処するために2000年日本政府の無償資金協力を基に、「ブルキナ・ファソ国地方苗畑改修計画」というプロジェクトが実行され、ブルキナ・ファソ国内の6箇所の苗畑(植林用樹種の苗を育てる畑)が改修されました。

その改修後に僕ら協力隊員が全6箇所の苗畑にそれぞれ派遣されて、この苗畑での苗木生産支援や、地元住民への植林啓発活動を行っています。



今ブルキナ・ファソ全体で50名弱の青年海外協力隊員が活動中ですが、その内11名が、このプロジェクト派遣チームのメンバーです。僕はこの11名の仲間と協力しながらこの国で植林活動を行っています。

## ③国の文化とか、文化の違い。歴史などについて。

この国は20年ほど前まで「オートボルタ」と呼ばれており、他の西アフリカの多くの国と同様、フランスの植民地化に置かれていましたが1960年に独立、1984年に国名を現地語で「清廉潔白な国」を意味するブルキナ・ファソに改めました。



日本ではほとんど知られていないブルキナ・ファソですが、前サッカー日本代表監督フィリップ・トルシエさんが1998年の1年間、この国のサッカー代表監督を務めていたことがあるんですよ。

そういえばこの2月に日本のU-20代表選手たちが合宿か何かでブルキナ・ファソにも来るという噂を聞きました。サッカーを通じて日本とブルキナ・ファソは何かとつながりがあるかもしれませんね。

あとブルキナ・ファソの生産物で日本に輸入されているものもいくつかあります。例えばリップクリーム材料(カリテという木になる実の種子からとれる油)や、ふりかけ・お茶漬けの素などに入っている胡麻などです。

この国には60くらいの民族がいて、それぞれ言語も違います。その内メインに話されているのは4民族語くらいですが、共通語であるフランス語が各民族間のコミュニケーションに果たす役割は大きいようです。

宗教はイスラム教30%、キリスト教20%そして伝統宗教90%といったところでしょうか。この国はそれほどイスラム色は強くないですが、イスラム教徒が毎日東のメッカの方向に向かって5回お祈りをささげる姿はよく目にします。

#### ④人々の様子暮らし。

この国の国民性は他の西アフリカと違って日本人とよく似てると言われます。例えば駐輪場などでハンドルの角度まできちんと合わせて自転車を並べたり、几帳面で整理整頓好きな人が多いようです。時間にルーズな人もそんなにいないし、意外に感じました。

この国は国連加盟国の中でも経済的にはかなり貧しい国です。やはりホームレスも少なくはないし、物乞いをする子供も都市部にはたくさんいます。しかしみんなが日々の食に困るほど貧しいわけではなく、例えるなら僕が親から聞いた戦後の日本のような感じでしょうか？

とは言え、貧富の差は激しく、住む家もない人もいれば、日本にも中々いないような大金持ちもけっこう多いです。情報化の波がこの国にも押し寄せていて都市部では携帯電話も普及して、インターネットカフェもかなり増えてきました。

その一方で農村部ではバンコという日干しレンガで建てた家に人々は住み、昔と変わらぬ生活を続ける人がたくさんいます。農村部と都市部のギャップもかなり大きいと言えます。

農村部に行くと、日本人とフランス人の区別がつかない人がいて(年配の人ほどその傾向が強い)、僕らがフランス語で話していると、「フランス人ですか？」と聞かれることもあって、結構おもしろいです。

そういう時は「うん。オレ、アメリカ人。」

というと本気で信じてるのでちょっと怖いです。

#### ⑤子供たちの様子

子供というのはどこの国でも変わらず、本来元気のかたまりみたいなものではないでしょうか。

それが戦争などによって、その笑顔が失われているだけの気がします。ブルキナ・ファソの子供も元気いっぱい、スポーツが大好きですね。中でもサッカーはすごく人気があります。ボールを買うお金が無いのでペコンペコンの古いボールを使っていますが、みんな目を輝かせてボールを追って裸足で走り回ってますよ。

この国は日本と違い、20歳以下の若年層が人口に占める割合が高く、街を歩けばたくさんの子供に出会います。兄弟姉妹が5人6人いるのは当たり前で、みんな妹弟の世話をしながら家のお手伝いをよくしています。

僕が住む街では水道を引いていない家庭が多く、そういう家庭では車輪のついたドラム缶で水を買って炊事・洗濯などの生活用水として使っていますが、その水を運んだり、かまどに火をおこして炊事を手伝ったり、ロバを引いて郊外の野原に薪を集めにいったりと実によく働きます。

中には家計を助けるためか、学校に行かずティッシュやライター、水やジュースなどを街頭で売り歩いている子供もたくさんいます。

子供達の社会にもある一定のルールがあるようで、喧嘩をしても誰かが仲裁に入ったり、年上の子供の言う事を年下の子供はよく聞いて、彼らなりに物はないけど工夫して遊んでいます。

なんだか話に聞いていた僕らの親の世代の子供時代と重なる点が多いように感じました。子供達の僕ら日本人を見た時の反応について。まず、赤ちゃんは大体ぼくの顔を見ると泣き出します。やっぱり色が白いのが怖いんでしょうか。

もう少し大きな子供になると「白！白！」と現地語やフランス語で声をかけてからかってきます。そういう時は逆に現地語で「黒！」と言い返すと向こうはこっちが現地語が話せることに驚いて、それだけで笑いがおきます。

## ⑥どんな食べ物があるのか。

こっちにきて半年経ちましたが実はいまだに住むはずの家ができていなくてホテル暮らしです。そういうわけで自炊ができないので毎日町の大衆食堂で外食してます。

最近こっちの料理に少し飽きてきた感がありますが、おいしいものも結構あります。こちらは当然ながら物価が安く、食堂で300~500cfa(5cfa=¥1)出せば、腹いっぱい食べれますね。今住んでる所は地方の中心部で物がそれなりに揃っていて、食材も結構多く、それほど不便に感じません。

こちらの主食は、ご飯やクスクス、トー(熱湯にトウモロコシの粉を混ぜ合わせて作る。団子みたいな味)などで、それぞれトマトソース、落花生ソース、オクラソース、バオバブの葉ソースなどをかけて食べます。朝などはコーヒーや紅茶とフランスパンで済ませる人が多く、このフランスパンが美味しくて気に入ってますね。牧畜が盛んなためか、ヨーグルトが美味しくて、袋に入れて100cfaのものを毎日食べててかなりのお気に入りです。

フルーツもバナナ、パパイヤ、オレンジ、スイカ、苺、レモン、グアバ、マンゴーなんかが季節に応じて手に入ります。中でもマンゴーが最高です。日本だったらスーパーで200円くらいしうんだけど、こっちなら20円くらいかな。あとスイカと苺も日本と同じくらいうまいですよ。

そうそう、こっちにきて食べれなかったものが2つあります。

1つはシュミンっていう毛虫を油で揚げたもの。食べた人曰く煮干みたいな味なそう。僕はもちろん「ノン。メルシー。」で食べるのパスしました。

もう1つはヒツジのスープ。これ、夜、薄暗い照明の食堂で食べたんですけど、味はおいしいんですよ。何がだめかっていうと、食べてるうちに気づいたんだけど、それがヒツジの頭を2つに割ったものだったんです。わかったとたん食欲が一気に失せていきました…。

あとビールの中瓶が400cfa。安いからってわけじゃないけど、けっこう飲んでます。前は考えられなかったけど、週5日は飲んでるかな。